

活での過酷な労働の辛い思い出が時折りよみがえつてきます。

亡き戦友のご冥福を心よりお祈りします。

沈黙の屈辱と抑留

滋賀県 川 清一

復員後の経歴

昭和二十三年十一月 千種郵便局復職
昭和二十四年一月 名古屋通信局出向
昭和三十七年四月 名古屋猫洞郵便局長拝命
昭和六十三年三月 定年退職（六十五歳）
現在、町内会の会計、氏子総代

昭和二十（一九四五）年三月五日、私は召集を受け広島に集結後、三月十五日に満州・黒龍江省琿琿県朝水、満州第六国境守備隊に現地入隊した。兵舎は煉瓦造りに、ガラス窓、板張りの床、被服は洗い晒した軍衣股、靴は革靴と一応整っており、内務班は厳しい規則で拘束されていた。

原隊では、一部の兵しかおらず、殆どは陣地で戦車壕や散兵壕掘りに従事していた。私も入隊後、原隊を離れて近くの「二站」の陣地で陣地構築に従事していたが、開戦時には原隊に復帰していた。

八月九日、ソ連軍が突如、国境を超えて攻撃を開始してきた。朝水陣地でも猛烈な戦闘機の機銃掃射を受け、隊員はすかさず軍装を整えて待機した。前線では一部のソ連軍が威力搜索的に進入して監視所を次々と陥落させたため、火を放って後

方へ引き揚げてきたが、若干の損害は被っていた。その日、私は一衣帯水の地点にある旭山陣地の守備を命ぜられた分隊に加わって、その配備に ついた。

旭山陣地は標高三〇〇メートルぐらいの小高い山で、前方には黒龍江が流れ、その江岸にある監視所とは常に連絡し合う地形にあった。陣地は堅固なコンクリート造りで固められ、下からラセン形になった多層階で、各階層にそれぞれの機能が分散されていて、最上階に司令部があった。半永久的な陣地だった。ところが開戦前後は物凄い雨で陣地内は水浸しとなり使用できないので、兵隊は外の散兵壕に出たままだった。

八月十一日、満を持していたソ連軍（第二赤旗軍）は、勝武屯、孫呉、瓊瑋陣地に本格的な攻撃をかけてきて、日本軍との間で激戦が続いた。

八月十四日、勝武屯等各重要拠点は大損害を受けるも果敢に反撃を加えて、いささかもひるまなかつた。

八月十五日、通信隊は正午の御放送を断続的にキャッチはしていたが意味不明のため、旅団長は交戦を継続した。旭山陣地でも近辺の戦況が漸次緩慢となり、下方の道路をソ連軍の車両や戦車が往来しているのが手に取るように捉えられた。その間、散発的な戦闘はあったが、最早ソ連軍はこの陣地など相手にしていないかに見えた。

八月二十日、旭山陣地では朝方になって、はるか彼方の草原に大きな気球が上ったのが見えた。やがて伝令が来て「武装のまま気球の所に集まれ」と伝えてきた。事の次第の説明もなく伝令の一言だけでは納得がいかず本部に行ったところ、既に誰もおらず、不安を抱えながら陣地内の兵隊は集まって気球の下を指して行軍した。気球の下に着くや否やソ連兵の指示で整列させられ、武装解除された。その後、大勢の日本兵の集まっているところに連行されたが、そこには司令部の者もいて、お互い薄笑いを交わすだけだった。ここで初めて「俘虜」となり、孫呉に向かって歩かされた。

前後左右はマンドリン銃を構えたソ連兵に囲まれ、ただ長蛇をつくって牛馬のごとく歩くだけだった。実に哀れな姿だった。沿道では満人がさげすむような目付きで刺すように、体を射るように見えた。途中、休息するたびにソ連兵は日本兵の持ち物を巻き上げるのに、何の抵抗もできなかった。

八月二十一日、やがて孫呉の旧兵舎に着いた。周囲は既に鉄条網が張り巡らされ、ソ連兵が警備していた。街は敗戦後、日本軍によって焼き払われ、まだ食糧倉庫などはくすぶっていた。行軍中からも満足な食事もなく、毎日何を食っていたのか今でも思い出せない有様だった。もう、食うためにはお互いが争い合わねばならない一種の飢餓感が漂い始めていた。

ソ連軍は、すぐ千二百人単位の労働大隊の編成に取りかかり、作業を命じてきた。それは、食糧など物資の貨車積みであった。戦前、ソ満国境近くの各陣地では、大量の食糧など物資を集積した兵站基地をつくり、持久戦に耐える態勢を備えて

いた。それは米・粟・大豆・砂糖・衣類など多品種にわたり、当時、世界的にも有数な備蓄基地と目されていた。いま、その備蓄された物をすべてソ連向けに運ぶための作業を日本兵がやっているのである。

九月下旬、約一カ月の積み込み作業が終わった頃、労働大隊はまとめて新しい目的地に行くことになった。再び大行軍が始まった。十日間ぐらい野宿を繰り返しながら到着したのが国境の街、霍爾莫津（ホルモジン）だった。この埠頭から、用意されていた船に積み込まれて対岸のコンスタンチンノフカに上陸した。黒龍江を渡るのに二十分ぐらいだった。初めてソ連領に第一歩を踏むことになった。万事休す、帰国の夢などはかなく消えていく。丸裸になった日本兵が上陸しても、ソ連の民間人はさげすむ眼差しで見ることすれ、寄りつこうともしなかった。私達が見たソ連の姿の第一印象は子供に集中した。まるで裸足で靴などははいていない。小さな体に日本軍の軍衣股も着

ている。大人は女ばかりで、男は年寄りと若い軍人ばかりが目立った。まさにソ連は「大砲とパン」しか作らなかつたのであろう。こんな国に敗れた日本軍の弱さをしみじみと感じ、心の底から情けない涙がこみ上げてきて仕方がなかつた。

ほどなく原野の中の集団農場（コルホーズ）に造られたテントに入り、一夜を明かす。寝床は持参のテント二枚を合わせて張り、その中に一枚を敷いて六人単位で横になる。

この頃のシベリアはもう冬化粧で、夜の霜は際立って白く降り注いで寒い。体を寄せ合つて体温でお互いを温め合いながら寝るのだが、なかなか寝つかれない。行軍の疲れから自然といつの間にか寝てしまった。

翌日から行軍が始まる。途中はコルホーズを涉つて農作業を手伝いながら野宿を続けていった。宿舎は原野に穴を掘つて土を両側に積み上げ、上にテントを張つて中にもぐり込んで寝るのである。食事は少量のパンとスープが与えられるものの、

相変わらず空腹は満たされない。田圃に捨てられている馬鈴薯やカボチャを拾つてきては水炊き（塩水で）、これは満腹感に似たものを感じる。体力はみるみる落ちていく。重い足を引きずつて行く姿は惨めさ以外になかつた。

十一月初め、約一カ月程かかつて「ライチハ」に着く。ここは炭鉱の街である。壮大な露天掘りの炭層が見える。黙々として働いている先入の労働隊員が目に入る。皆、下を向いて力なく動いているようである。到着した我が大隊を收容するところがなかつた。野宿の延長をして十日間程滞留した。この間は専ら炭層の清掃作業を強いられた。作業が終わると隣の「アロチカ」に移動することになった。アロチカはライチハのいわば郊外に当たるところで、ここも炭鉱の街である。早速、收容所に入れられる。高い鉄条網に囲まれ、四囲には監視のための望楼があり、どこでもあるようなタイプのものだった。まるで罪人同様の扱いで、先着の隊員も大勢いた。宿舎は半地下の木造で洞

穴のようであった。ちょうど、長い牛舎を半地下にしたようなもので、真ん中に通路があり、両側は二段式のベッドになっていた。その上下段にゴ口寝するのだが、一棟で百五十人ぐらい入れた。昼間は医師の診断（尻をつねって弾力をみる）を受けて、許可がないと作業を休むことはできない。零下四〇度にならないと休むことができない。

当初、外の露天掘りで石炭道路の新設や建物の建設などの作業をノルマ付きでやらされていたが、ここでも百パーセント達成しないと減食させられた。

ほどなく本格的な石炭掘り作業に入った。採炭作業はショベルカーによるものと手作業によるものに分けられていたが、日本兵は後者をやらされた。手掘り作業は「土の取り除き組」「石炭掘り組」「運搬と貨車積み組」などに大分されていた。石炭掘りは、土を除いた炭層をロシア人がダイナマイトで爆破すると、先の丸くなった鶴嘴で掘り起こす。それを貨車に積み込む。貨車のレールの取

替えなど一連の作業が続いて、二十両の列車を編成して仕上げとなるが、すぐ次の作業に取りかかることになり息つく暇もなく作業が続く。寒い風が吹きすさび、手足がしびれ、鼻水が凍って痛くなる。自然と動作が鈍くなると、すかさずソ連兵が銃を構えて「ダワイ、ダワイ、ビストラ」と追い立ててくる。食事は相変わらず乏しいもので、朝は雑穀の薄いカーシヤ（粥）で、飯盒の蓋に八分目ぐらい。昼は黒パン三百グラムだけ。夕食は朝よりは少し濃い目の雑穀のカーシヤと青いトマトの入ったスープ（塩汁）。これらが重労働を強いられた日本兵の一日の食事だった。このように厳しい重労働、乏しい食事、凍える寒さの三重苦に加えて永い間の旅の疲れが加わって栄養失調者が続出してきた。やせ衰えて声も出ないまま眠るように死んでいく者、熱にうなされて帰国の夢でも見たのか大声で叫びながら死んでいく者など、この世の地獄絵を見せられたる惨状が目の前で毎日繰り広げられた。しかも死者は誰に悔やまれるこ

ともなく、誰に読経されることもなく、外に掘った穴に放り込まれて異国の土となっていた。

二十一年一月、こんな作業を続けていたある日、隊長に呼ばれて「旋盤の経験があつたら修理工場に行かないか」との誘いがあった。苛酷な採炭作業から逃れられたら幸いとばかりに早速承諾した。工場に行ったら、旋盤工、仕上工、溶接工、製函工、鍛造工など五人組の組合わせが済んで、経験者が集められていた。この修理工場はロシア人が二十人程いたので、私達を含めて二十五人の従業員となった。主として掘削に使う「シヨベルカー」の修理を専門にしていた。設備は一応揃っていたが新しいものはなく、いずれも古い物が目立っていた。中には「菊川」の旋盤もちゃんと据えられていた。作業は炭層の掘削現場にある。大型のシヨベルカーの故障が出ると、その部位の工程作業が決定され、工場長の命令で作業が始まる。作業内容は、メタルの取替・ひび割れの充填・蒸気洩れの修復・心棒の取替などからボルト・ナットなどの補充な

ど、修繕各般にわたった。各工程での作業が完了すると、その取付けは現場でロシア人が担当した。

当初のうちは要領もつかめなかったが、ロシア人はいかにも先輩らしく命令に従うよう仕向けるため、もっぱら見習うしかなかった。六カ月もたつとロシア人ベースで作業が進んではいたが能率が上がらないため、工場長はノルマの遂行を強調し出した。これでは、せつかくラーゲリを抜け出してきたわけがなくなるような危機感が漂ってきた。そこで五人組は鳩首協議して、日本人のノルマ達成基準をつくって工場長に提示し、承認を得て実行に移すことになった。実績は着々と上がり、各工程の能率も倍化し、質・量ともに格段の改善を見ることになった。工場長は感謝してくれたし、現場も喜んでくれた。窮すれば通ずるで努力の結果が報われ、ノルマ達成が連日続くこととなり、ノルマ超過分のルール貨の賃金までくれた。やがて修理工場では技術指導員の認定までくれて、ロシア人の指導にも当たることとなった。

二十三年九月頃、この修理工場を後にしてライチハに戻り、そこから帰国の途につく。約一カ月ぐらいナホトカに滞留して軽作業に従事し、十一月に舞鶴に復員した。

願れば、酷寒の地で重労働と飢餓に耐えながらも命だけは長らえてきた経験は、荒廃した内地に還ってきてから社業を復興させるのにどれだけ気力を与えてくれたか知れない。

抑留記

大阪府 岡崎 博好

時あたかもアテネ五輪でせわしい日々、日の丸を背にした選手に声援を送りながら、ふと脳裏をかすめる思い、それは国家とは、国民とは何かというところでございます。加えて八月十五日の終戦記念日のいろいろな新聞ニュース。

昨年五月、劇団四季の「異国の丘」のミュージカルを観劇しましたが、浅利慶太の演出もさりながら、出演者の熱演に、当時の悲哀をしのびて涙を禁じ得ませんでした。「私たちには語り継がねばならない歴史がある……」というテーマ。

しかしながら六十年の風雪は、私達自身が日露戦争の実感がないのと同じように、今、これからの日本人には戦争という恐怖も悲しみも、理不尽さも理解することはできないのかも。

平成十六年八月十七日